企業が求めるグローバル人材

“青年海外協力隊”という戦力。

最近、若者の内向き志向が各方面で取り上げられている。日本人の海外留学者数は、2004年をピークに年々減少。企業の新入社員については、3割以上が、海外勤務に対して消極的な姿勢を示すという。一方で、多くの企業が、「グローバル化」に対応できる人材を必要としている。今、企業が求める人材とは―。住友化学株式会社およびユニチカ株式会社の人事部にお話しをうかがった。

JICA ジャイカ

身に付けた「積極性」と「たくましさ」。いまや協力隊経験者がキーパーソンに。

住友化学株式会社
人事部長
芳野（よしの） 寿之（としゆき）さん

海外に多くの拠点を持つ企業にとって、「グローバル人材」は必要不可欠です。当社が考えるグローバル人材とは、語学力はもちろんのこと、高い教養と見識を持ち、途上国／先進国、あるいは海外勤務／日本勤務を問わず、常に「世界」を視野に入れ、お客様や共に働く社員との間に信頼関係を積極的に築いていける人材を指します。具体的には、世界の変化や需要を、迅速かつ敏感に察知できる力、相手の文化や習慣、バックグラウンドを尊重しながら、自身の意見を的確に相手に伝え交渉を成立させる力などです。

特に、自らの意思で途上国へ赴き、創意工夫をこらしながら活動をしてきた青年海外協力隊経験者は、「積極的に外部と関わっていく力」と「競争社会で生き残っていくたくましさ」を備えた、魅力ある人材だと言えます。そうした能力を持った皆さんが、「企業人」としての高い意識を持って仕事に取り組むとき、それは企業、そして社会全体にとって極めて有意義なものとなります。

現在、当社に在籍している協力隊経験者はグループ全体で14名います。そして、当社が独自の技術で開発し、アフリカを中心に供給している「オリセット®ネット」（マラリアを媒介する蚊から身を守るための防虫蚊帳）の開発・普及・販売、あるいは現地工場での技術指導を担当する社員のなかには、複数名の協力隊経験者がキーパーソンとして活躍しています。彼らは、現地の人々やお客様と強固な信頼関係を築き、それぞれがネットワークを広げています。企業人としての責務を果たすことが、企業の成長だけではなく、社会への貢献にもつながる、これは企業活動の基本であるとも言えます。

次代を担う若い方々には、多様な経験を価値あるものとすることをふまえ、その経験をいかなる分野で、どのように生かすのかをあらかじめ考えながら、自身の歩む道を見極めていただきたいと思います。当社の企業理念にもある「世界中に信頼と感動の輪を」、この言葉を体現できるようなグローバル人材が数多く生まれていくことに期待します。

住友化学株式会社
ベクターコントロール事業部
技術開発部 チームリーダー
中西（なかにし） 健一（けんいち）さん

S56年度派遣
派遣国　ケニア
職　種　土壌肥料

私が、協力隊に参加したのは大学卒業後まもなくの1981年のことです。土壌肥料学を教えるため、ケニアの大学に派遣されました。現地では様々な苦労がありましたが、マラリアに感染したときは、繰り返す高熱に心身ともに衰弱したことを覚えています。帰国後、住友化学に入社し、1992年以来、アフリカ地域を担当しています。日本とは何もかもが異なるアフリカ諸国に対して不安や抵抗どころか、親近感をもって仕事に臨めるのは、やはり協力隊での経験がベースにあることは言うまでもありません。現在は、マラリア感染予防のための蚊帳（オリセット®ネット）の技術普及や特命プロジェクトに携わっています。マラリアに感染した自分の経験が、アフリカの人々をマラリアから守りたいという熱意につながっています。そして、自分が携わるビジネスが国際協力に直結していることに、大きなやり甲斐を感じる毎日です。

「協力隊経験者はグローバル人財。」事業の拡大にも大きく貢献。

ユニチカ株式会社
人事総務部
人財グループ グループ長
藤田（ふじた） 正展（まさのぶ）さん

ユニチカでは、「人材は財産である」との考えから、「人材」を「人財」と表記し、若年層の「人財育成」に注力しています。育成担当者からは、「近年の若い社員は、与えられたことは着実に対処していくが、ともすれば受け身なところがある」との声が聞かれることもあります。基礎能力の高さや真面目さについては、私たち人事総務部でも高く評価していますが、エネルギー溢れる若い世代の皆さんにはもっと、「自ら切り開く力」あるいは「突き進む力」を発揮してほしいと願っています。

そんなことから、当社では採用の段階から次の「4つの力」を求めるようにしています。①情熱 ②実行力 ③前向きさとタフさ ④対話力。これらの力を軸として、各自が存分に「個性」と「強み」を発揮し、周囲と力を合わせながら、社会にとっても会社にとっても良き「変化」を起こしてほしいのです。

そういう意味では、協力隊経験のある当社の社員は、途上国での活動を通して「4つ力」に磨きをかけ、さらにはグローバルな感覚を身につけて、復職後はそれらを強みとして、日々の業務に、そして、事業の拡大に、大きく貢献してくれています。大概の社員は、業務内容がそれまでとは大きく異なる配属に不安を覗かせるものです。しかし、当社の協力隊参加経験を持つ社員の1人は、未経験分野であるにも関わらず、現地での活動を通して鍛え抜かれたチャレンジ精神と柔軟性で、水の「ろ過膜」の研究に、人一倍の熱意をもって取り組んでいます。また、異文化のなかで人間関係を築いてきただけあって、どこへ配属されても抜群のコミュニケーション能力で、周囲からの信頼を得ています。今後も、その明るく前向きなエネルギーを周囲にも波及させていってほしいと期待するところです。

当社が長年にわたって培ってきた高い技術力を持って、世界のマーケットに高分子や機能材をはじめとした「機能資材」を供給していくことが、私たちの使命です。したがって、協力隊経験者に代表されるような、グローバル人財に寄せる期待は非常に大きいと言えます。

ユニチカ株式会社
技術開発本部 中央研究所
井上（いのうえ） 邦子（くにこ）さん

H18年度派遣
派遣国　ブルキナファソ
職　種　村落開発普及員

入社4年後に、ボランティア休職制度を利用し、協力隊員として西アフリカのブルキナファソで活動をしてきました。協力隊での活動は2年という期限付きですから、「成し遂げてみせる！」という情熱は不可欠です。また、現地の人々から信頼を得るには、自らが率先して行動していく必要があります。言葉も文化も異なるなかでの活動に、挫折は付き物です（笑）。でも、それで精神的に随分と鍛えられ、タフになれたと思います。そして、周囲と分かち合い、協力し合いながら1つのことを遂行していくために、絶対に「対話」は欠かせません。場所が、途上国であるか、日本の職場であるかの違いはありますが、今述べたことはどんな仕事の分野においても同じように言えるのではないでしょうか。「深い信頼関係が築けている職場でなら、絶対に良いものを生み出していける」、そんな自信もまた、協力隊での活動を通して学んだことの1つです。

～JICAボランティアのウェブサイト内「サポーター宣言」では、青年海外協力隊のチカラを活用した様々な企業の事例を紹介しています。～